

「幼児にとっては、漢字はかなよりずっと覚えやすい」こと、そして「鳩は鳥よりも覚えやすく、鳥は九よりも覚えやすい」ということの発見から、幼稚園で漢字教育を行うべきであることを主張したのは、昭和 42 年のことである。

ふり返ってみれば、すでに 15 年の月日が流れている。この間、幼児開発協会が創設され、私の主張は、井深大会長、鈴木鎮一先生始め、多くの先生方の賛同と支持を得て、その普及に大きな力があつたのにもかかわらず、漢字教育の実践幼稚園は、全国の何十分の一にしか及ばない。

しかし、15 年間に及ぶ私どもの実践によって、「幼児の漢字教育は是か否か」を論ずる段階は完全に終わっているのである。幼児には、漢字教育が絶対に必要なのである。漢字は、何よりも幼児の能力を大きく開発する力を秘めた道具であり、しかも、幼児は漢字を学ぶことによって失うものは、何一つないのである。それらのことはすべて十分に証明済みなのである。

ところが、それが一般にはなかなか理解されにくい。「旧習に泥^{なす}んで」それから離れることが出来ないからである。また、それを指導すべき学者たちは「所聞に溺れて」いるものだから、私どもの発表を素直

に受け入れることが出来ないのである。

食べてみようともしない者に対して、その食べ物の味を理解させることが不可能であるように、こういう態度の人々に対しては、私どもは実に無力である。だから、進んで仲間になろうという人々には仲間になってもらったが、こちらから「仲間に入ってくれ」とは努めて言わないことにして来た。

また、ひどく見当違いの非難も浴びせられて来た。そのために、実践直前の幼稚園が実践を見合わせる、という例も少なくなかった。それでも、その非難が見当違いであることをあえて弁解せず、「解るまで気長に待とう」という態度を取って来た。

こうして 15 年の月日が流れたのである。たった一つの幼稚園の実践から、それも全く四面楚歌の中で始められたこの教育が、今は熱心な多くの先生方の理解と支持を得て、三百余の幼稚園、保育園で実践されるまでに発展して来た。

今、この 15 年間にふり返ってみる時、「知る人ぞ知る」という態度で、あえて世の誤解をとく努力をせずに来たが、もうその面の努力をすべき時ではないかと思う。筆を執る所以である。